“これってジャズかも..”人生のいたるところに「ジャズ」は溢れる。オンラインで行われた対談は笑顔が絶えないが，その発する言葉の意味は深い(写真右上は動画制作協力の林トモコ氏)

海原　それ，確かに。もしかすると私が紫乃ちゃんと友達でいられるのはそういう「お金にならなくても面白そうだからやる」人だからかも。お金になることしかやらない人とは友達になれないなあ。新しいことを面白がってやる気持ちがジャズマインドかも。たまにものすごく稼いでいるジャズミュージシャンもいますけどたいていは貧しいですね。私もこの10月に新しいCDを出したんですけどお金になるどころか赤字ですね(笑)。新しい形のCDにしようと思い，普通のCDにしないでUSBメモリにハイレゾで音源を入れてライナーもPDFに。それをポーチに入れてみました。ポーチはあとでいろいろ活用できるように。リップクリームとか入れられるし。Boplicityというマイルス・デイビスの曲に詩を付けたBebop Livesというヴォーカリーズでは，ビバップはIt began as experimentとなっていて，最初は実験みたいに始まった，というわけ。だからお金かどうか，売れるか否か，評価されるか否か，ではなく新しくやってみる，面白がってやってみるのがジャズマインドですね。紫乃ちゃんのサックスかなり上達したんじゃないですか。前はテイクファイブ練習してましたよね。小説に登場する人物のためにサックスを始めたんですよね。

桜木　テイクファイブは，なかなか伴奏と同時に終わることができません(笑)。実は「緋の河」というカルーセル麻紀さんをモデルにした小説を書く時，物語の中に流れるのが〈枯葉〉だったんです。戦後のススキノで女装のお店に勤めているお姉さんが，戦場で好きになったフランス兵士が歌ってくれたのが〈枯葉〉だった，という設定で。書きながらいろんな人の演奏や歌の〈枯葉〉を聞いていて，自分も何かできないかと思ったのね。好きなことを仕事にして，もうなにも望むことはなかったはずなのに「わたしの人生，何か足りない」，それはもしや音楽では，と。それで53歳の誕生日に島村楽器に行って，いきなりサックスを買ったんです。唐突ですよね。純子マインドでした(笑)。

海原　それに傍観者じゃなくてやってみるというのがいいですよね。

桜木　全く楽譜も読めないし。メリーさんの羊から始まったんですよ(笑)。だからメリーさんの羊は聞かせるレベルに達してる(笑)。好きな曲を体の中に入れて，いろんな伴奏で吹くのが目標。今も，半年くらいかけて１曲ずつ仕上げてます。

海原　そのジャズのルーツはどこにあるのでしょう。

「ジス・イズ」の店主，小林東さんのこと

桜木　私が生まれ育った釧路は港町で“ジス・イズ”という古いジャズ喫茶があったんです。店主の小林東さんが亡くなってお店は閉めてしまったけれど，世界の名だたるジャズメンたちがやってくる店だったの。日野さんや山下洋輔さんもいらしていて，道東の文化の大切な発信地だったんです。店主の小林さんに励まされてプロになった表現者の，何と多かったことか。多くの表現者は小林さんに助けられました。私もその１人だと思ってます。

30年以上前はものを書いていても，イメージばかり先行していてなかなか上手く伝えられなかった。原田康子さんを輩出した土地なんですが，それ以降半世紀近く女の物書きは出ていなかったんです。私が書き始めた時も，文学じゃないって言われがちだった。それで悩んでいた時に“ジス・イズ”に行ったら，信じられないくらい濃い珈琲を淹れてくれて，キース・ジャレットやコルトレーンのレコードをかけてくれるんです。ぽつんぽつんと「どうしよう」と言ってると，小林さんが「自分のやってることが文学だと信じないでどうするの。これが自分の文学だ，って信じなよ。信じたらそうなっていくんだから…」って。当時「自分を信じる」ということを教えてくれたのはジャズメンでした。通っているうちに，ジャズメンのあいさつが，出会いもさよならもハグだということを教えてもらったんです。

それから10年以上経って，プロになってはじめて東京の書店員さんにご挨拶に行けるようになったんですね。心を込めた挨拶ってハグしか知らなかったんで，いきなりやったら書店員さんにびっくりされました。

ところで，音楽のジャンル分けを見るとクラシックの横にジャズが並んでいてそのあとに別枠でロックとなっていますよね。なので私，クラシックとジャズは同じ棚にある音楽ジャンルだと解釈していたんですよ。

海原　え，そういうこと考えたことなかったですねえ。でも今の若手ジャズメンは小さいころクラシックやって人は多いです。私のオリジナルを作曲してくれてる若井優也さんは2歳からクラシックピアノを習い，芸大の先生に作曲習ってたし。時々私が譜面読んでこれ分かんない，とかぶつぶつ言ってると，「あ，それ僕，そういうのは小学生の時やってた」とか言われちゃう(笑)。ショパンなどはとてもうまくてライブで弾いたり自分のCDに入れたりしてますね。

海原純子最新作『Waltz for Y』はUSBメモリーによるリリース。パッケージはポーチになっていて活用用途が広がる。
この作品の販売はこちら

桜木　クラシックからジャズに移行するときの気持ちの動きって，どういう感じなんだろう。

海原　より自由に感じるのかも。ソロではクラシックで表現しきれない自分の表現が広がるからかも。

桜木　恥ずかしい話だけど，私ソロのアドリブの部分を譜面どおりに練習してるんですよね。これ，ぜんぜんジャズじゃないわぁ。

海原　恥ずかしくなんてないですよ。すごく大事だと思う。たくさんコピーしてるうちに自分のものが出てくるし。

読者が本を開いたとき，１対１のライブが始まる

桜木　それを聞いてほっとしました。練習するけど，これは私の一生じゃ足りないな。3，4回生まれ変わらないと，思うところに到達しなさそう。

海原　時間かかりますよね。真似じゃない自分のものが出てきてそれに納得できるまでには。ほんとに到達しないです。

桜木　それは小説も同じです。人のまねをしてたらあっという間に仕事がなくなるの。そうか，もしかしたら表現全般がジャズなのかな。

いつもちょっとずつ変えていく。失敗してもいいから挑戦していく。そう考えると，失敗というのはないのかも。100パーセント全力をつぎ込んだものって，たとえ売れなくてもそれは失敗じゃないですね。私のやってることはリアルタイムのライブではないけれど，読者が本を開いたときに1対1のライブが始まるんです。私とセッションしてくれるのは読者なんですね。

桜木紫乃最新刊にして初のフォトブック「彼女たち」(角川書店)。「できあがってみると“これはジャズでは”」と思ったと自身が語るように，小説家，写真家，デザイナーがトリオのセッションのようにコラボして完成した一冊

対談後記　このほかにもいろいろと話は続きました。自分のオリジナルの世界を築くには時間がかかるのは小説もジャズもエッセイも同じ。そして人生もまた力の出し惜しみをせずに人と比較せず，自分を表現し挑戦し続けながら築きあげていくものかもしれません。

この対談の模様は一部を動画公開しているので併せてお楽しみください